

三河アララギ

平成二十二年

十月号

第五十七卷 第十号



ニューヨーク日記(48) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

July 4, 2010 : NY Rooftop

Blue Shoe Diaries



お腹いっぱいになったら建国記念日の休日は屋上にあるバーで暗くなるのをまつ。ま〜本当は花火が良く見える場所を陣取りしているだけなんだけど。しかし暑い！夏だからね。でもNYらしくないNYの景色でしょ？エンパイアー綺麗だけどなぜかマイアミに居るみたいなヤシの木！ちょっと面白い景色みながらカクテルタイム！

With bellies full of BBQ, what to do on Independence Day other than to hang out at a NY rooftop bar? In reality we were staking out prime space to view the fireworks! And we got such space. Almost a bit surreal looking. It's like putting NY and Miami into one. Palm trees in Manhattan? Why not? Now, bring on the cold cocktails. It's way too hot today!

目次

第五十七卷第十号(通卷六八二号)

| | | | |
|---------------------------|--------------|--------------------|-----------|
| 表紙(ドラゴンフルーツ) | 今泉 由利(一) | 雨音 | 小野可南子(二七) |
| ニューヨーク日記(48) | Blue Shoe(二) | 限界 | 夏目 勝弘(二八) |
| 感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓より」(四) | 杉浦 弘(五) | 猫 | 秋山 逸穂(二九) |
| 歌集一本の木 | 岡本八千代(六) | 花火と浴衣 | 井村 喬泉(二九) |
| 白桃 | 白井 久吉(七) | 贈呈誌 | (三〇) |
| すでに秋めく | 今泉 由利(八) | 私の一首 | (三一) |
| 五七五七七 | 伊藤八重子(九) | | |
| ご先祖さま | 弓谷 久子(十) | | |
| 夏椿 | 青木 玉枝(一一) | ことよせ | 杉浦恵美子 |
| 海の匂ひ | 佐々木利幸(一二) | 入院 | 内藤 志げ |
| 茶白山に | 内藤 志げ(一三) | 油蟬 | 林 伊佐子 |
| ジャンボ南瓜 | 金津 文枝(一四) | 和歌から派生した季語の本意(その三) | いーはとぶ(三二) |
| 私の自慢 | 半田うめ子(一五) | 俳句 | 伊藤 忠男(三二) |
| 野菊 | 胃甲 節子(一六) | | 白井 信昭(三三) |
| 百日紅 | 清澤 範子(一七) | | 佐藤 喜仙(三三) |
| 八王子神社 | 近藤 映子(一八) | | 植村 公女(三四) |
| 猛暑夏 | 伊与田広子(一九) | | 佐藤 喜仙(三五) |
| 体操を | 林 伊佐子(二〇) | 物理学者と詩歌の世界(9) | 一石(三六) |
| 熱中対策 | 安藤 和代(二一) | 鎌田敬止という人(四十六) | 皓一(三五) |
| 魅せられ | 北川 宏勉(二二) | 萬葉一葉(321) | 鮫島 満(三八) |
| 微笑む | 杉浦恵美子(二三) | 「氷魚」のことから(117) | 今泉 忠芳(四〇) |
| 手助け | 堀川 勝子(二四) | ことのはスケッチ(382) | 岡本八千代(四一) |
| 食卓囲む | 平松 裕子(二五) | 和菓子街道(48) | 今泉 由利(四二) |
| カマドウマ | 山口千恵子(二六) | お知らせ・編集後記・三河アララギ規定 | 平松 温子(四三) |
| つぶやきぬ | | | (四四) |

感 銘 歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より

澤ふかく立ちしづまれる竹の上こえゆく電車あたらしくして

P
145

わが庭に雪ふらなくにみ冬すぎビラウは枯るる紙のごとくに

P
146

歌集

一本の木

杉浦弘

「額田の里」音頭

めかたのさーとはちまのうえ とりはさえずりはなもさく
くうきのすーんだべってんち ここはまさしくじょうどです

『額田の里』音頭

作詞 杉浦弘
作曲 杉浦道生

一 額田の里は

鳥はさえずり
空気の澄んだ
ここはほんとの
浄土です

山の上
花も咲く
別天地

二

不思議な縁を
つどいかたらう
三度の食事を
今日を楽しく
お互いにお互いに
わたしたち
いただいで
過ごします

三

ふたりの親から
いのちひとつを
若いなさに
あすを元気に
さすかった
大切と
守られて
迎えます

白桃しらもも

蒲郡 岡本八千代

小学生一年の時の担任のわれに送り来白桃しらもも一箱

数へ年今は六十歳か彼の生徒思ひつつ啜る甘き白桃

白桃の一つさながら絵にも描き君への礼状今夜は書かむ

久しぶりに久留米緋のモンペ穿く柳川恋し白秋恋し

ちちははの精霊遠くになりにつつ盆提灯あかりに燈点せり

遠部屋の盆提灯のほの明かり丸テーブルには大人の孫らよ

丸テーブルを囲みて飲み干す何とかビールわれは冷え冷え赤色番茶

お互ひにコップ寄せあひ祝ふごとこの盃蘭盆会の一夜のひととき

帰るべき者ら帰りぬまたふたりけふもあかあか百日紅の花

鉛筆を持つ手元まで光さす東ひんがしよりのけさのひかりは

すでに秋めく

新城 白井久吉

海倉^{かいくら}の天王祭の花火さへ足を運ばず音を聞くのみ

ことばさへいまだ言へざる幼子が掃除機とりて母の真似する

宇連川^{うれ}の水を引きたるプールにてニジマス飼ひしことも懐かし

花のなき朝顔棚も夜の部屋に網戸を越して涼しさを呼ぶ

ひとりでに生えしナツメの若木には今年初めて実の着くを見る

老いの身に病いくつも持ちながら命のありて卒寿めでたし

幾すぢも静脈走る瘦腕に止まる藪蚊今打たむとす

午後の四時過ぎれば日射し傾むきて吹き来る風はすでに秋めく

差し出す医師免許証手に取りてしみじみ思ふ永き年月

くさぐさのこと思ひつ眠りつつ二時間半の点滴終る

五七五七七

東京 今 泉 由 利

日毎日毎五十の花を咲き継ぎ私に芽生へしひと草あざみ

花守の最後の花と守りきぬ薊の種の風にのるまで

今日もみゆ一番近い距離の星一番大きく宵の明星

自の命のことのあと少し算段のしつつあのことこのこと

どうしても黙しをれなきことにして戦争はいや「一本の鉛筆」

地球なる大気に突入するときを彗星のチリ光りを放つ

カシオペアとペルセウス座とを先ず探し見付けむとする流星ひとつ

彗星のこぼしゆきたりチリ数多地球の空に星は流るる

割り切れぬ素数の故にほのぼのと余韻のありて五七五七七

日本語とタミル語とのリズムにて五七五七七短歌に親し

ご先祖さま

豊川 伊藤八重子

東京の子の手に抱かれ故郷を去り行く兄よ仏となりて

盆施餓鬼に今年も来たもふ住職と互みの健康たしかめ合へり

年毎に高砂子百合は庭に咲きご先祖さまの精霊迎ふ

形好き^よ初生り南瓜飾るごとキッチンにあり吾子の笑顔と

銅^{あかがね}の仏具を磨き仏壇に供物飾るも私の慣はし

刻毎に仏餉供へる精霊さま手際よろしく嫁^{よめ}ごが運ぶ

菊の苗定植せんと出でし外灼けつく暑さに踵^{かかと}を返す

仏の花床の間の花取り替へて平たく坐るわれの定位置

天辺^{てんぺん}に高砂子百合の花の数白くのこして盆もゆきたり

さやかなる音色たのしも縁側に南部風鈴の舌がまひまふ

夏 椿

豊川 弓 谷 久 子

文集に載りしみさとの詩の中に我也登場す「御津のおばあちゃん」

今日一日一人憶はむ空爆を共に逃げゐて逝きにし友を

馬追の声は何時より途絶えしか耳をすまして鉦叩きを聞く

臥してゐる姉の目線と向ひあふ童女となりし九十二歳の目

炎天より茶房に入りぬ入口に夏椿の絵の飾られゐたり

子の描きし花の絵十六点並びゐる茶房にありて落着かずをり

法師蟬の朝の一啼き勢ひあり残暑きびしと我には聞こゆ

運びゆく時はあるかパン屑を啣へて雀は又飛びたてり

真夜中に仰ぐ満月中天にまるく小さくかくも明るし

子より来しベージュの靴の柔かし萎え来し足を踏みしめ歩む

海の匂ひ

伊丹 青木 玉枝

米寿なるわれの歩みに合せ来て息子と故里のさざ波を聴く

蓮の花一輪交へ送り火の夫の墓洗ふ二十七回忌

蒲郡の港に立てばなつかしや海の匂ひを一杯吸ひて

夫逝きて歳月偲ぶ伊勢の海骨をまき収めし日はるかなり

三回忌終へて見えくる少しづつ妹との生活の思ひの幾つ

暑き夜を吹きくる風を待つ部屋に四とせを過ぎぬ海なき伊丹に

連れ立ちて旅の集ひも遠くなり信濃路木曾路と寝椅子でテレビ

点滴のポトリポトリとわが腕に束の間の安らぎに目をとちて

杖をつき川土手歩むわれの背に夕陽と赤トンボ乗せて帰る

なつかしの昭和のメロデー聞きながらわたしの青春たしかめてをり

茶臼山

豊橋 佐々木利幸

猛暑になる天気予報を聞き終へて老いの遊びとパソコンの操作を
広辞苑に我はひも解くパソコンの操作に使用するタグといふ語句

幾所か撮りに行きたしと読みて居り南信州の街道ガイド

今の世に無きメーカーのカメラを持ち今日は巡り居り売木村を

デジカメに買ひ替へることも無しと我は携帯をするフィルムカメラを

茶臼山に今日はたゆたふ積雲を幾枚も撮る売木峠より

売木村に撮影実習を楽しみ居り長島の峠を今日は下り来て

風味がよきを聞かされつつ売木産の玉蜀黍を十本も買ふ

暑き今日はとくとくの清水を含みたり売木川の水上来て

撮影をせむシシウドを探し居り小枝の田居に今日は来りて

ジャンボ南瓜

豊川 内藤 志げ

一株に一つを育てる若者のジャンボ南瓜は抱へる程に
鎌首のごとき勇まし南瓜の蔓隣の畑に道に延びゆく
わが南瓜触るるべからず脆きもの今日の大きき葉の間に覗く
横たはるジャンボ南瓜は俵ほど向きも直せぬ眺めて帰る
花の歌鳥の歌にもほつとする病と幾年過ごされる方
丈高きエノコロ草を眺めつつ日照る背中を壁に冷して
積乱雲鼠色淡き雲の行くゆるき流れを眺めて飽かず
三幅の盆の掛軸床の間にわが家の宝と一人思ひぬ
床の間の仏を描きし掛軸の謂れ知りたし亡き人遙か
一つ木の陰に三人一休み嫁の差し出す麦茶のうまし

私の自慢

島根 金津 文枝

酷暑日に絵手紙の墨摺りをれば瞬く間に乾く硯石

三十五度の酷暑続きに堤防の桜並木の葉が枯れ初める

三十五度の酷暑に毛布敷布洗濯物乾き早けれど暑さには耐へられぬ

岩倉寺の大銀杏酷暑遮り高台は涼しく町並を見下ろす

様々の樹木大きくなり町並を見下ろす事も難しくなりましたと御内儀

お地藏様を掃除したつぷり冷水を頭より赤き前垂れにも

送り火を焚き終りベートーベン合唱団の気持良き八月十五日

雨水を貯め十三年前より利用していた事が今の生活に得と私の自慢

分析室にわれ一人原爆の音を米子市で聞きぬ六十五年前

二日続きの夕立やみぬ十六夜の月あかあかと冴えて美し

野 菊

新城 半田うめ子

せんぶりを煎じて飲みきわが父は風邪を引きしも医薬を嫌ひし
せんぶりを採しつつ父の畑にて歩き居りしも目につかざりき
二十年前に植ゑにし木蓮の屋根を越へたり伸びにのびたり
庭中に鮮やかなり小花にて数多咲きをりその名を知らず
川辺にて野菊咲きをり眺めつつ杖をたよりに歩き行くなり
西川の上を舞ひをり白鷺さぎの真白二羽なり美しかりき
スベリヒユ貰ひ来たりて胡麻和へに夕餉食みをり独りの生活
好きな物食みつつ体力おとろへて室の掃除も怠りてをり
孫の来て海幸丸の寿司もちて味のよくしてお茶もつきをり
父言ひき苦あれば楽あり若き日の苦勞は買つても出よと言ひたり

百日紅

豊橋 胃 甲 節 子

おぼろなる夢路に顕てるうから等の何告げ度きかとひねもす思ふ
新盆の優しき人の面差しを忍びつつゐて涙流るる

紫陽花の花殻すでに乾燥花となれども未だ剪定出来ず

見る程に清々可憐に咲き続く小さきぎぼうしの淡きむらさき

お隣との境の草取り剪定を気にするばかりで暑さに敗けをり

此の暑き真夏の花よ美しく強き百日紅は優しく咲き満つ

籠る部屋にそれぞれエアコン効かせつつ私は読み書き夫は昼寝す

汗しつつ家事をこなすも散歩さへ出でざる暑き日々の気だるさ

黄昏るる稲穂に宿る露なども触れてみたきよ散歩に出でて

毬栗の季節となりぬ其のみどり指で輪作り思ひみるなり

八王子神社

春日井 清澤 範子

結婚より仕事選びて吾が娘今日より第二の会社に通ふ

辛くつらい面接幾度もくり返しやつと決りて頑張る娘

八王子神社に拝礼吾が夫と娘の頑張り願ひは届く

猛暑の中八王子神社へ詣でゐる神殿の御弊涼風にゆれる

菜園に植ゑある南瓜の葉の上に百日紅の花散るしきり

胡瓜の手外してをれば吾が肩の右からスイーツと赤とんぼ飛ぶ

門にバタツと音して蝉が落ちにけり仰向けにもがくを立ちて見てをり

前立腺ガンの値少なくとも尚もホルモン剤続ける夫よ

母が今居ませば九十二歳なりまだまだ聞きたしことを思へり

畝に青く太りし蕪を手扱ぎて浅漬けにする吾の好物

猛暑夏

名古屋 近藤 映子

文月の末の猛暑は口内の唾液も枯れるよだるき一日

猛暑夏夫の体力気になりて見舞ひ来たり日傘頼りに

わが夫よこの夏も又乗り切りて無事に過ごすを願ひ願ひて

オーガスト八月葉月暑き月汗かきて夏風邪を引く

夏祭小学校区の盆踊り夕暮れて太鼓の響き始まる

思ひ出す生姜ハチミツレモン液まぜてふくめばしばし咳止む

バスの中咳込み押さへるマスクの手しばらく離すこと出来ず

夏風邪に夫の見舞ひも出来ぬ日々一週間は長く長し

南には早や台風四号発生とTVニュースを暑く聞きたり

今日は処暑なおも猛暑のこの暑さ残り少なき葉月の夏日

体操を

豊橋 伊与田広子

山沿ひは雨降りたるらし牟呂用水は豊かに波立ちなみなみ流るる

スーパーの前にて友と別れたり互に健康祈りながらに

西日照る通路を歩きバス停へ止めどなく汗の流るる

公園の木の下通れば流るる汗拭ふが如き風の吹きをり

バス停は西日を受けて暑くなり少し離れて家影に待つ

駅ビルにてモンキーバナナと抹茶買ふ又バスに乗り帰り行くなり

抹茶飲み胃に優しきか傷み消え以後絶やさずに家に置くなり

介護など受けぬやうにテレビにて体操をす足腰揃はず

電話にて話してをれば大雨と豊田は雨か豊橋降らず

熱中症にならぬやうにと用意しぬ電気ポットに湯沸かし置きぬ

熱中対策

岡崎 林 伊 佐 子

幾たびも野菜の陰に身を寄せて休憩をとる熱中対策

里芋の葉陰に陽をさけ抜く草にはぜるかたばみ吾が頬をうつ

露にぬれ汗にぬれての畑仕事時計の跡が白く残れり

畑より大玉西瓜を収穫し舟型に切りうかららと食ふ

豊作の西瓜を夫が配り行く二人ぐらしの老いたる友に

四年ぶりに埼玉県より帰省してお盆休暇を友は過しぬ

この夏は長き猛暑にひぐらしのかまびすしい声も少なき

老い二人退屈しのぎに夕庭にグランドボールの勝敗たのしむ

庭草に混ざりて咲ける露草の露けき花を机に活ける

長旱にトマトの花も咲かぬまま素枯れもせずに葉月もすぎぬ

魅せられ

豊川 安藤 和代

ひと日とて忘るる事なき嫁のこと夾竹桃の白さ眩しく

エグザイルの歌わからねど日び孫が聞きをれば吾も魅せられ

「めっちゃうれしい！」高二の孫は成績の上りたる事吾に告げくる

「ほっけがいい」「鯖がいい」等と孫等言ひ魚売り場をいきつもどりつ

茹で時間「二分」に魅せられ求めたるマカロニは孫に人気のあらず

友くれしカサブランカは夜の部屋に苦しきまでの香りを放つ

午前四時静かな空気震はせて朝顔ひとつひらき始めり

揺るる葉に隠れるように並び咲く紫式部のその小ささよ

草刈機の小さく聞こゆ窓に立ち青草の香の風に乗り来る

「カア」「コウ」と啼き合ふ鳥愛などを語りてゐるや夕映えの中

微笑む

東京 北川 宏 廼

何もかもそれを試せし人がゐてその恩恵を文明といふ

本当に大丈夫かと妻に聞く妻に問ふべきことであらねど

土曜日の分厚き折込み広告に欲しきものなし女房安堵す

三十年使ひし財布の捨て時を考へてゐる財布に済まぬが

回復の見込み立たぬと放送のあり渋谷く原宿ひと駅歩く

猛暑でも昨日と違ふその暑さ秋はたしかに近づいてゐる

前頭部タオルを巻きて猛暑日を連載原稿もう一息ぞ

日に一度母と息子が顔合はす無口の出会いにつこり微笑む

「あなた」から「パパ」と呼ばれるやうになり大政奉還したことを知る

蝉の声に無常を知りたる若きとき今はただただ虫の声なり

手助け

蒲郡 杉浦恵美子

彼方には梅雨明け夏の山並みがくつきり見ゆる市民球場

梅雨明けの空高ければ野球の試合観戦してゐる我が小ささよ

あつさりと負けて仕舞ひぬ相手校の校歌流るる時間が長い

形原の高架を走る名鉄電車花火の空に吸ひ込まれゆく

櫛に鳴く蝉を聞きつつ校庭を通りて居りぬ我が夏休み

東京に行きて刺激を得たるらし常とは違ひ語り止まない

ああこの子志望大学見付けたりこの情熱を愛しく思ふ

わが助言染み込むやうに伝はりぬこの子真摯に取り組んでゐる

十八歳彼等の本気の取り組みに接する私の小さき幸せ

夏休み閑かな教室生徒等の未来に向かふ手助けしてゐる

食卓囲む

豊川 堀川 勝子

褐色の我が二の腕と柔らかき孫の白き手食卓囲む

穂孕みの稲田の緑さやさやと穂先にきらら朝露の玉

朝なさな日焼け防止のヘチマ水なみなみと付け畑へ出で立つ

赤き赤き果肉ぱっくり曝しつづつす籠えゆくもあり吾の西瓜の

熟れてゆくものの匂ひにしがみつきカブト虫雌食欲盛ん

水道の蛇口陣取りおもむろに蠅螂我に斧振りかざす

カマキリの斧無き顔は今風の草食系なり見慣れて愛し

ギターの音色聴こゆる窓辺に寄りゆけば常は寡黙な青年が君

幼らの手より逃れし風船一つ部屋の真中に今も残れり

幼らの手より逃れし風船が物の動かぬ部屋に残れり

カマドウマ

豊川 平松 裕子

虫の名はスエ先生に教はりきそのカマドウマ浴室に跳ぶ

足長く枯れ色の虫鳴きもせずただ跳びはねるカマドウマ哀れ

何処より入り来たるか不思議なり浴室にをりカマドウマひとつ

我が家のユニットバスの浴室にはねてはすべるカマドウマなり

湯をかぶり逃げむとすなりカマドウマ我はカマドウマをからかひてをり

人ならば我がからかひを怒らむか哀しむらむかカマドウマ一匹

朝までには帰りに行かむよカマドウマ追ふは止めたりひとり遊べよ

鳴くことも飛ぶこともせず浴室に夜を過せるカマドウマなり

何処にか帰りに行くかカマドウマ跳ねても届かぬ浴室の窓

浴室の排水口の蓋の隙間カマドウマは来たり帰るか

つぶやきぬ

豊川 山口千恵子

処分せむ稲刈機は未だ新しと未練がましくわがつぶやきぬ

耕運機稲刈機またハーベスターわが使ひたるもの運ばれゆきぬ

一通りの農機持ちちるし小さき農家今日はすべてを処分したりき

無造作に農機積み上げ大型車は何ごともなげに走り去りたり

くれなるの汁したたらせ策に拡ぐ土用干しする今年の梅干し

手拭をかむりしおほ母炎天に梅干しほしゐし遠き思ひ出

皺ばみしあかき梅干し納めたり日のぬくみを手に感じつつ

見はるかす竹島はるか靄の中ちちはは眠る桔梗山墓地

隣り合ふ墓にも水を分け捧ぐ朝の墓原人かげのなし

恐竜の背中のやうな青一つ植垣被ふゴーヤーの蔓より

雨音

豊川 小野可南子

夜の窓大きく開けて耳すます遠く聞こゆる雨音らしき

我が庭に大粒の雨到達す地を打つ音のこの音の良し

雨音を聞きつついつしか睡るらし庭木に雫の玉なす朝よ

草を搔く手鋤の刃先の乱せるは小さき黒き蟻の一群

打水を済ませしばかりの朝の道マラソン人が会釈して過ぐ

西空の低きに淡々満月よ今日のはじまるこの朝の道

畑土は固くしまりて水弾くいはんや手鋤の刃先をさへも

夕されば畑土湿しとらす水撒きぬ明日の朝こそこの草取らむ

涼しいと思ふ感覚に目ざめたり今日の一日の楽しくあらむ

ひむがしの黄金の光に向きてゆく肌にやさしも今朝は涼風

限界

豊川 夏目勝弘

自転車にて四時間かかりし郵便配達体重今日は三Kの減
郵便の配達先の水道より水を盗みて暑さを逃す

熱中症の予防と靴の中敷にビワの葉二枚かさねて敷きぬ

風通る蔭を見つけて休みつつ配達してゆく限界にきぬ

黒アリが見向くことなき塩センベイ赤アリ来たりて運びゆくなり

我が汗にて滲みし葉書を受箱にすみませんとひとりごちつつ

汗ふきつつ年賀葉書の注文受くるこの愚かさも仕事なりけり

片男波に合はむ計画はばみしは猛暑につづき台風九号

網戸より風の入るなし真丸き朱き月が不気味に昇る

ビールにて暑さ一時この暑さ過ぎれば止めますあと一本と

「招待」

猫

東京 秋山逸穂

犬つれた人らのたまる細路地の塀にてまるく猫眠りおり
青杉の山へと通う畔道に一本の蛇よこたわりおり
野良猫は我がものがおにাগりこみ餌をくれよと身をこすりつく
朝の雨暗さ残してしとしと始発電車の駅舎をぬらす
車道には轆かれ熨されしものありて蛙の形かすかにのこる

花火と浴衣

東京 井村喬泉

中央線車両が開き浴衣着し男女が冷気をとまなひ降りぬ
花火から遠ざかりゆく電車へと乗りたり扉はゆつくり閉まる
天井に吊らるる花火大会の告知にけふの日付を知りぬ
窓にある優先席の字の下にとほくに弾くる花火が見ゆる
浴衣着しこともなければ花火見しこともなかりき学生の夏

贈呈誌 八月号

地藏川に水車がゆっくり廻る音長閑な町の長閑な時間

「冬雷」

吉田綾子

「青森アララギ」

三上信子

大胆に花びら落す芍薬の雌蕊はすでに膨らみてをり

日ざし伸びさ緑萌ゆる畦の草濃きもうすきも吾が目によさし

「柀」

石動玲子

「秋楡」

中島宣予

ゆるやかなカーブに添ひて連なる灯立体橋の夕暮れて来ぬ

故郷へ急ぎて向かう車窓から目にとびこみぬ赤岩つつじ

「群山」

平間喜久子

「愛媛アララギ」

住田鈴

待ち待ちし郭公鳴きてやうやくに我が住む町に春は来たりぬ

ボタン押し一人乗りたるエレベーター扉開きてはっと降り立つ

「榎の木」

八木あや

「鹿兒島アララギ」

南和男

今日は今日の気力頼みて歩み行く川土手はすでに葉桜となる

月光のわれの机におよぶころ帰らんとして背を伸ばし起つ

「穂の原」

大谷登美子

「高知アララギ」

中村美枝

千住真理子バイオリニストの体型はアスリートの如筋肉のつく

照るでなく雨降るでなく飛ぶ鳥の声も聴かない動かぬ一日

細く白き月は東にすじ雲の茜色なす今日は立秋

神谷叔子

「滋賀アララギ」

伊谷昌子

北欧の荒地に分布するといふエリカは庭に長く咲きつぐ

今村たかの

「灯」

岩田隆子

体力の無き長男の幼き日思ひ出すなり二十五年生れ

私の一首

二割引嬉しき織部の鉢抱へ雨降り止まぬ土岐の街行く

杉浦恵美子

新聞の催物案内で「織部の日」というイベントがあるのを知り、最終日の日曜、思い立って一人で出掛けました。しかし降り立った土岐の街は人影も疎らで、会場に辿り着いても客よりも係員の方が多いのでは、と思う程閑散。広い会場内を行きつ戻りつ散々迷ってさして高価でもない鉢を求めたら何と割引。嬉しくなつて冷たい雨も気にならず、次は資料館へと長い坂道を上つて行つたのです。不況のせいか土岐の街は淋しく感じました。

ころころとシーダテープの播種機押す腰を曲げずに玉蜀黍が蒔ける 内藤 志げ

シーダテープ。種子が水に溶けるテープの中にくるまる。一卷を機械に入れ押して行くだけ、今年は特に雨が多く土の塊のごろごろ中。従来は等間隔に穴をあけ、種を落し、土を被す。腰の痛い作業でしたのでこの歌となりました。今は出荷の時季となりわが家の玉蜀黍を待つていて下さる方も何人かありこれが励みとなります。私は農作業の歌しか出さずもう少し写生の歌が詠めるようにと思っています。

霜注意報のニュースを聞きて夜の庭の君子蘭花鉢を軒場に入れぬ 林 伊 佐 子

君子蘭は、石蒜科の多年草木。花茎は一尺五寸ぐらいに達し花を下向きの房状に着ける。橙赤色の六弁で筒形。冬季は、温かい縁側で保存する。今年、天候異変で四月になつても遅霜の被害に遇つた。夜、テレビのニュースで遅霜のあることを知り君子蘭を軒場にかこう。わが家の君子蘭は、年数もたつているので二本植えてある鉢に六本の茎を立てて咲く。松の下蔭に花灯をともし、長く楽しめる。花を咲かせるための手入れも大切である。

『いとよせ』 西浦公民館(いーはとぶ)

黄緑の実に膨らめる無花果のほひ漂ふ真夏日の畑
 雨あがり今日のみ空の青高しその下の樹木の今こそさみどり
 羽あをき蟬の一つが扉の前にとまりてゐたり亡母かと思ふ
 陽炎の立つ日の空のま青さよ飛行機雲はただただ長し
 海の方稲生へ続くその向かう上りくるなり今宵の十六夜
 子規好みし秋海棠の花咲きぬ庭隅に小さく薄きくれなる

牧原正枝
 岩瀬信子
 三田美奈子
 稲吉友江
 鈴木美耶子
 吉見幸子

入院 大阪 伊藤忠男

世の中は盆の最中か病室の窓より見ている夏の空
 欠伸すら出来ぬ辛さに看護士の笑顔配り感謝している
 この食事これが最後と箸をつける何故か懐かしい薄味の味

油 蟬 豊川 白井信昭

家の暑さ逃れ来たりて御津山の蟬の時雨の風吹きわたる
 パタパタと空気を伝ふ音のして油蟬ひとつ我に落ちたり
 朝早く花火の音は近くして我は目覚める猫は隠れる

和歌から派生した季語の本意（その三）

「笹」同人 佐藤 喜仙

6 夜寒（夜寒さ・夜を寒み）

晩秋の夜の寒さを言う。心理的寒さにも使われている。朝寒の古い用例が乏しいのに対し、夜寒は古くから和歌に取り入れられ、その用例も多い。

「と夜ふかく旅の空にて鳴く雁はおのが羽かぜや夜さむなるらん」

伊勢大輔（後拾遺集）

「きりぎりす夜さむに秋のなるままによねるか声の遠ざかりゆく」

西行（新古今集）

例句

椎の実の板屋を走る夜寒かな

暁台

夜寒さやひきしほりぬく絹糸きぬの音

久女

あはれ子の夜寒の床の引けば寄る

汀女

7 末枯（末枯るる）

秋も末になり、万物寂しくなる様を言ふ。特に草木に露の降りるころ木々も枝先から、野山の草も葉の先から枯れはじめて、凋落の兆が物のあはれを誘う。

「わが背子に吾が恋ひをれば吾が屋戸の草さへ思ひ末枯れにけり」

詠人知らず（万葉集）

「わが恋は庭のむら萩うらがれて人をも身をも秋の夕暮」慈円

（新古今集）

この様に末枯の季語から感得する万物のあはれが古への歌人の心を動かしたのである。

例句

うら枯れていよいよ赤し烏瓜

太祇

海底のごとくうつくし末枯るる

青邨

病めばものはかなき草も末枯る、

草城

末枯や心事他人に言ふを得ず

風三樓

8 鶏頭（かまつか・雁来紅・韓藍かんあひの花）

鶏頭は熱帯アジア原産で、中国を経て古く渡来したヒユ科の一年草である。七、八十センチあまりのたくましい紅色の茎を直立し、妖艶な鶏冠状の花序かじよをなし、深紅の無数の細花のかたまりをつける。花期が長く觀賞花として庭で栽培されることが多い。

「秋さらば移しもせむと吾が蒔まきし韓藍の花を誰か採つみけむ」

詠人知らず（万葉集）

「吾が屋戸に韓藍かんあひ時おほき生し枯れぬれど懲こりずて亦またも時かんとぞ思ふ」

山部赤人（万葉集）

例句

ぼつぼつと瘦せけいとうも月夜なり

一茶

鶏頭の十四五本もありぬべし

子規

鶏頭を三尺離れもの思ふ

綾子

鶏頭をたえずひかりの通り過ぐ

澄雄

「俳句」

炎昼や鑑視カメラの首動く

植村公女

事故あとのバックミラーや益の月

三叉路の小さき渋滞秋桜

原爆の原罪負ひ炎暑なり

一石

時間とは幻影なるや盆踊り

朝顔や機械仕掛けのやふに咲き

能登訛久しく聞かぬ秋夕焼ゆやけ

佐藤喜仙

五月雨のジューンブライド尚美しやは

しなやかに忍び来てゐし夜冷かなやりよう

道端にころがる生命や油蟬

皓一

法師蟬まだまだまだ暑く鳴きにけり

闇の夜にひと声ひと声蟬と虫と

物理学者と詩歌の世界 (9)

一石

は原子物理学への貢献により1922年ノーベル物理学賞を受賞。

20世紀初頭、物理学では相対論と量子論の誕生という二大革命があった。その革命の一方の主役がA・アインシュタインであり、もう一方がニールス・ボーアであった。N・ボーア(1885-1962)は、デンマークの理論物理学者。量子論の育ての親として前期量子論の展開を指導、その後の量子力学の確立に大いに貢献した。父クリスティアンは生理学者であり、ボーア一族からは高名な学者が輩出した(弟ハラルトは数学者、息子オーゲも1975年にノーベル物理学賞を受賞、参考資料1)参照)。

コペンハーゲン大学で学んだ後にイギリスへ留学(1911)、A・ラザフォードの下で研究に着手。1913年、コペンハーゲン大学に戻り、「原子とは、原子核のまわりを電子が回っている太陽系のような存在である」というラザフォードの発見に基づき、「ボーアの原子模型」を提唱し、前期量子論の発展に重要な貢献をした。1921年、コペンハーゲンに理論物理学研究所を開き、W・ハイゼンベルグやP・A・M・ディラックなど多くの有能な物理学者を招いてコペンハーゲン学派を形成することになる。歴史上、彼が活躍した1920年代は物理学の世界において最も多くの天才を輩出した物理学黄金時代であった。その多くがコペンハーゲンに「ボーア詣で」をしている。後年、日本の物理学界を育てた仁科芳雄もここで研究生生活を送り(1923)、後にボーアを日本に招聘している(1937)。ボーア

その後も、W・ハイゼンベルグら弟子たちとともに、量子力学の構築を推進。量子力学の解釈を巡ってA・アインシュタインと20年余にわたって論争を続けて説得しようとした。アインシュタインは「確率によって操られる量子論の世界像」をけっして認めようとしなかった。有名なエピソードにアインシュタインの「神はサイコロを振らない」という言葉に反論した名言「アインシュタインよ、神が何をなさるかなど、注文をつけるべきではない」がある。当時の物理学界のクリスマ的存在だったボーアは多くの物理学者から慕われ、量子力学の形成に指導的役割を果たし、後に「量子力学の父」と呼ばれることになる。

第二次世界大戦が始まると、母がユダヤ人であったボーアはナチスの迫害を恐れアメリカに渡った。1939年に発表されたボーアの原子核分裂に関する論文は、原子爆弾開発への重要な理論的根拠になった。しかし、ボーアは軍拡競争を憂慮し、西側諸国にソ連も含めた核兵器の抑止に向けて管理及び使用に関する国際協定の締結に奔走した。

ボーアは物理学だけでなく哲学にも深い造詣があった。若いころ、実存主義哲学の祖となったデンマークの哲学者キルケゴールの思想に傾倒していた。そのような素養を背景に量子論の解き明かした粒子と波の二面性、位置と速度の不確定性という原理(原子を構成する粒

子の位置と速度を同時に知ることはできない」などの世界像を「相補性の原理」として一般化した。これはその後物理学以外の分野、心理学や社会学、経済学、美術などあらゆる分野に影響を与えることになる。さらに量子論と東洋哲学には類似性があるとして、「相補性原理」との関連で陰陽道に深い興味を示した。

著作に『因果性と相補性』（山本義隆編訳、岩波書店）、『量子力学の誕生』（山本義隆編訳、岩波書店）などがある。

ボーアは生前、論文以外の文章をほとんど発表しておらず、彼の言葉は周りに集まっていた人々の記憶としてしか残らなかった。彼の残した言葉に次のようなものがある（参考資料2）参照。

○「自然がいかにあるかを見出すことが物理学の任務であると考えることは誤りである。物理学は、われわれが自然について何を言い得るかに関するものである。」

○「私が述べるすべての文章は、断定ではなく、質問であると理解されるべきである。」

○「原子物理学の東洋哲学との類似性を認識するためには、われわれはブッダや老子といった思索家がかつて直面した認識上の問題にたち帰り、大いなる存在のドラマのなかで、観客でもあり演技者でもある我々の位置を調和あるものとするように努めねばならない。」

○「*Contraria non contradictoria sed complementa sunt.*」〔対立は矛盾ではなく、互いに相補し合うものである。〕

○「エキスパートとは、ごく限られた分野で、ありとあらゆる間違いをすべて経験した人物のことだ。」

ボーアをよく知る人達の言葉も挙げておく。

○「：：また彼は、自然の法則を少数の基礎的な原理に還元しようと、試みもしなかった。彼の哲学は、体系ではなくてむしろ接近の仕方、あるいは姿勢であった。」（R・ムーア）

○「われわれが観測しているのは自然そのものではなく、われわれの探求方法に映し出された自然の姿だ。」（W・ハイゼンベルク）

○「物理学者というものは保守的な革命家である。」（H・R・ページエル、『量子の世界』）

○「彼は大理論物理学者であるばかりでなく、実験をしない実験家であり、発見をしない発見家である。」（H・B・カシミア）

参考資料

1）フリー百科事典ウィキペディア、「ニールス・ボーア」

2）<http://www3.ocn.ne.jp/~zip2000/niels-bohr.htm>

鎌田敬止という人（四十六）

「月虹」 鮫島 満

白玉書房時代

〈高村光太郎との交流（8）〉

昭和二十二年になると鎌田の白玉書房設立の決意はいよいよ固まり、光太郎に、

白玉書房のことは米岡氏や東京の青磁社の人達の完全な理會を得ました。後援もしてくれるさうです。別に頼る気持ちではなく飽くまで自力でやつてゆくつもりですがお互にヘンな気持ちにならないでやれることはうれしく思ひます。そしてなほ当分青磁社は現職のままといふことになりましたがこれは社内の都合上のことでして、勿論私としては白玉書房に主力を傾注する訣です。

（昭和二十二年六月一日付）

と手紙を書いている。この年の秋には、「青磁社に異変があり、十月から社員十三名も一時に退社するといふ事になりましたため（略）編集企画陣は総退社して事実私一人だけになりました」（昭和二十二年十一月二十二日付）という手紙を送っている。やがて青磁社は解散し

鎌田は白玉書房の経営に力を注ぐことになるのである。

4 「ロタン」「天上の炎」をめぐる

昭和二十一年に青磁社編集長の鎌田によって企画され、その「後記」まで書かれながらついに刊行されなかった「ロタン」という「本」がある。鎌田の企画を聞いたころ、光太郎は鎌田への書簡に、「『ロタン』はアトリエ社かアルス社との関係に御注意下さい。途中で故障が起るといけませんから。」（昭和二十一年十二月三十日付）と書いている。実はこの「ロタン」は昭和二年にアルス社から刊行されており、青磁社から出されれば再刊になるはずであった。昭和二年には鎌田はアルス社の社員だったから彼には懐かしい本であった。この話には光太郎も非常に積極的であった。光太郎から鎌田への手紙によると、「比間森谷均氏から『ロタン』を出させてくれといつてきました。が、むろん承諾しませんでした。」（昭和二十三年二月十日付）とあり、光太郎としてもこれは鎌田の仕事にすべきものと考えていたことがうかがえる。これを知った鎌田は光太郎に「森谷さんロタンのことは土方さんからも聞いて知つてる筈なのに、どうしてお願ひしたのでせうか。ヘンな気が致します。しかし先生がお断り下すつて大変有りがたく存じました」（昭和二十三年二月二十日付）とお礼を書いている。この本はこうして息の合った二人によって具体化されていった。

光太郎宛の鎌田の手紙に、

今度青磁社で純文芸雑誌を創刊することになりました。「個性」（仮

題」といふのです。その創刊号に是非先生の御原稿を頂戴いたしたいと編集部全員が熱望いたして居ります。ロダンに就て思出風のものなり極く軽にお気持でお書き願ひ、デッサンを二三枚入れて三四頁位の読み物に出来れば結構です。

以下白玉書房の事を申し上げます。「ロダン」から先きに申し上げますがアルスの方は完全に諒解ができました。土方さんのお骨折ります。只今アートのいいのを探して居りますがこれが決定すればその数量によつて何枚入れられるかがきまる訣です。枚数の多いのも、いい紙にいい印刷をすれば数が少くても却て立派になると思ひます。はじめはグラヴィヤも考へてみたのですが、やはりアートの網目版できつぱり印刷できる方が好ましいと思はれます。

(昭和二十二年七月二十八日付)

右の「個性」という雑誌は創刊されるにいたらなかったやうであるが、ここにロダンについて何か書かせようと鎌田が思ったのは、新しいものを頼むよりもいま進行中のものの方が確実性があると考えたからだろう。手紙の後半には、鎌田が白玉書房を近々設立することがうかがわれる。「土方さん」は、土方定一のこと、この「ロダン」の編集に専門家として携わった。

鎌田は昭和二十三年には青磁社に勤務する一方で白玉書房を設立した。そして「ロダン」を白玉書房の最初の仕事にするつもりであった。

鎌田が白玉書房から書いた光太郎宛の手紙には「ロダン」の挿絵次のやうに土方さんが試案を出して下さいました」としたうえて細かい作業手順や進行状況が報告されている。また、鎌田は、

○「ロダン」の写真は近日中に揃ふ筈です。土方さんが上野へ行つて選定してくれました。

○「ロダン」本文の原稿お送り願へませんでせうか。(中略)原稿を入れてから半年は見えておかないと駄目ですから、少しも早く原稿を渡しておきたいと思ひます。序文もお暑い時に恐縮ですがお書き上げ戴いて、御一緒に頂戴できれば大変好都合です。

○「ロダン」は(中略)発行は恐らく来年の二、三月頃になるのではないでせうか。それが出来る前に「美について」の改版を発行したらと思ふのですが、この方の御訂正は割合に楽にお出来るようになるのではないでせうか。今の時世に工合の悪いものを割愛していただき、後記か序文で断り書をお書き願へばよろしいと思ひます。「美について」と「ロダン」と相前後して出版できるやうですと私として非常に有り難いのですが。

(昭和二十三年七月二十九日付)

とも書いている。そして、「ロダン」の原稿もやがて届いたのであった。ここに鎌田は唐突に「美について」の刊行をも頼んでおり、白玉書房の出版物の中心に光太郎のものを置く考えが強く現れている。

萬葉一葉(32)

今泉忠芳

磐姫その二十三 山多豆

古事記に曰く、輕皇子、輕の太郎女に奸けぬ。故その太子は伊予の湯に流さへき。この時、夜通王、恋慕ふに堪へずして追ひ往きし時の歌に曰く

君が行日長くなりぬ山たづの迎へを行かむ待つには待たじ

(巻第2・90)

ここに山多豆といふはこれ今の造木といふ者なり(1)。

「山尋ね」が「山たづの」になっているため、萬葉集の編集者は「山多豆といふはこれ今の造木」のことと左注を付けた。

岩波古典文学大系本は次のように解説している(2)。

山たづ——今のニワトコ。枝や葉が相對しているので、ムカへの枕詞に用いた。新撰字鏡に造木・女貞とあり、名義抄に楨・接骨木ミヤツコギとある。ミヤツコ *miyatsuko* がニワトコに転じたのは語頭のミとニの音は交替することがあるによる。ミナ↓ニナ(蜷)、ミブ↓ニブ(壬生)、ミラ↓ニラ(葦)など類例がある(2)。

夜通王(輕の太郎女)の歌とされているのは、磐姫の歌が伝承されているうちに、転用されたものである。「山尋ね」だったものが「山たづの」に誤用されたと見る。誤用の「山たづの」が表記されてしまうと、その解釈が必要となる。萬葉集編集者がその説明のために「造

木」を持ち出した。そのため、後の研究者はそれに従って説明を付ける。新撰字鏡(漢和辞書。12巻。昌住書。漢字を扁・旁によって160の部首に類聚し、その字音・字義・和訓を注したものの。醍醐天皇昌泰年中(898~901)に成る。)(広辞苑より)。類聚名義抄(漢和辞書。平安末期成る。和漢の音義・辞書。訓点本の集成。編者未詳。)(広辞苑より)から造木を引いて意味付けをしている。

造木はミヤツコギと読むようであるが、ミヤツコギをニワトコにするには屈折した説明になる。これが唯一の解かどうかも気にかかる。山たづがニワトコになっているのは、枝や葉が相對していると解説されている。ニワトコを見ているでも迎への枕詞として、直感的にはすぐに入ってこない。「ぬばたま」は黒の枕詞として多く用いられているので、そういうものと思うのであるが、「山たづの」は他に例がないので馴染めない。

歌を作る作者の立場の感覚からみて、人を迎へに行くときの歌として「山尋ね」は自然であるが、「山たづの」はその着想がや、感覚を離れているように思われる。

磐姫の歌(巻第一・85)が口承されているうちに「山尋ね」が「山たづの」になって衣通王のことに誤用されたものと思われる。

(1) 佐々木信綱新訂・新訓萬葉集上巻・岩波書店・1997年9月16日。第5刷・72頁。

(2) 高木市之助他・日本古典文学体系4・万葉集1・岩波書店。64頁。

「氷魚」のことから(117) 岡本八千代

きのう、全国高校野球大会が終わった。

興南(沖繩)と東海大相模(神奈川)との決勝戦であった。興南が勝った。勝ち負けはともかく、この猛暑の中、戦っている選手たちはもちろん、応援の高校生たち、甲子園のすべての人々に何ともいえない美しい情熱を感じさせられた。

テレビで観ての私ではあるが、とくに感じたのは、その少年たちのたくましさの中にあつた清純さであつた。——青春期の心の行動として、実に男らしい、純情が伝わってきた。

正岡子規死して百八年、野球好きな彼がきのうの試合を観ていたら何を感じただろうか。今頃は、かの子規庵の柵には糸瓜の黄の花盛りで、小さい糸瓜がいくつもぶらさがっていることだろう。

「余は小説家にはならぬ。余は詩人になる。」と言つた子規は、それにして、「月の都」以外に十編、(翻訳一篇)つまり計十一編を書いていた。

たとえば、「龍門」・「銀世界」・「山吹の一枝」・「月の都」・「一日物語」・「当世媛鏡」・「月見草」・「花枕」・「曼珠沙華」・「我が病」・「レ・ミゼラブル・翻訳」等々である。

こうしてみると、やはり子規は、小説家にもなりたかつたのではなからうか？

近代文学の研究者助川徳是先生の論文「子規の小説——その復権の

ための覚え書き」に、「子規の小説について何か言うなら、せめて講談社版の『子規全集 第十三巻』(一九七六・九)だけでものぞいて貰いたい。」とあつたことを思い出した。これより、十三巻の全集の中の小説一作を読み、私なりにまとめてみたい。

もちろん、助川先生の「覚え書き」、全集の中の「参考資料」、「解題」を参考にしてのこと。

(1)「龍門」について。

・著作年代は明かではない。表現は文語調。鼠骨は「明治十八九年の作と指定している。

・内容は、年の暮ること——書生連が「若竹亭」へつれだつて、文楽を観に行くところからはじまる。

「若竹亭」では、次から次へとお客が来るが、或ひとりの書生の隣に、十五六の美しい娘をつれた老女(五十歳ぐらい)が坐わつた。そのひとりの書生は、かの女づれが二階へ上るから坐わりきるまで見ていた。文楽の方は、ご縁^{ご縁}という処を演じている。

そこから人情話になる。——ところがひとりの書生は、隣に坐わつた女性のことが気にかかつて、他の書生が言うことにはうわの空。——青年が若い女性に魅せられる心理が描かれている小説と私は思った。

風見(書生)は、「昼はまぼろし、夜はうつつダ」というところでしたわりとなつてゐる。この小説は未完稿と注にある。

ことのはスケッチ (382) 今泉由利

『コラーゲン』

宇宙始まって以来、進化の末。うれしかったり、悲しんだりしている生物として私自身も存在しているのに「生物の始まり」へ、まだゆきつけない不思議。

水の性質を知り、少し生命のはじめに近づけた気持ちになったから、いま謂われている生物のはじめを調べることにした。

地球がはじまって約四十六億年。西オーストラリアの三十五億年前の、隆起した地層に、かつて深海の熱水噴出口付近の環境において、細胞分裂をした生物の化石が発見された。

現在、最古の生命の化石とされている。

この化石のシアノバクテリアは、光合成をしていた。光合成は、複雑な営みが必要であり、最初の生物がその機能をもっていたとは考えられない。もっと単純であつただろう。生命の始まりは、この化石より溯ることになる。

地球の始まりの頃は、地表は紫外線が強く、変化も激しく、安定していたのは深海だった。熱水噴出口付近は、エネルギーに満ち、栄養豊かなところで、生命の元は、ゆっくり進化したのだろう。

シアノバクテリアとは、真正細菌の一郡で、光合成により酸素を生み出すもの、単細胞で浮遊するもの、小数細胞の集団をつくるもの：いろいろな性質のものがあつたと思われる。

あるシアノバクテリアは、ストロマトライト岩石をびっしり覆い、

光合成をして大量の酸素をつくり出した。

光合成とは太陽の光のエネルギーで水を分解し、二酸化炭素を炭化水素などの有機物にする作用のことで、水を分解するときに廃棄物として酸素ができる。

当時の多くの生物にとって、酸素は有害だった。酸化されて生存の機能が失われたり、酸素を苦手とする嫌気性生物は、酸素を解毒できる好気性細菌を自身の身体に取り込み、共生をしただろう。

大量の酸素がつくりだされゆきわたると、酸素を大量に必要とするコラーゲンを作りだす生物があらわれ、細胞同士が接着がはじまった。単細胞生物で留っていた生物に、多細胞化が促進され：今の生物へと続く…。

コラーゲンは、タンパク質のひとつで、多細胞動物の細胞外基質の主成分。今の人間の体内の全タンパク質の三十パーセントを占めるのだそうだ。

最も大量に存在するコラーゲン線維性は、骨に含まれ、骨に弾力性をもたせ、皮膚の真皮にも多く、皮膚の強さを生み出す。軟骨、眼珠の硝子体液であつたり。

細網線維コラーゲンは、網目状の構造をして、細胞などの足場を作り、傷などの治癒を進ませる。

美容、健康…の存在かと思っていたコラーゲンの根本にであえた。人間が出来上がるだけの細胞を、コラーゲンが接着しつづけたこと、コラーゲンが地球に生れいでたことをまず思う。

細胞間接着にセルローズを利用した生物は今の植物へと続いたのだった。

和菓子街道 (48)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

徳川家康の居城・岡崎城を中心に広がる岡崎の町は、府中や宮宿と並ぶ東海道屈指の巨大な宿場町だった。宿場の中心部には老舗も多く残る。その一角に大店を構える備前屋の創業は、天明2年(1782)。屋号は、かつて岡崎城にあった備前郭からとったものではないか、八代目のご主人はそう推測する。

そんな備前屋の代名詞ともいえるのが「あわ雪」だ。実はこの菓子、元はおかずだったらしい。江戸時代、街道を上下した公家などの日記に岡崎名物として紹介されている「あわ雪豆腐」は、鰹だし汁と醤油に山芋のすりおろしを入れて作ったあんを豆腐にかけて物だったようだ。

明治に入りこの料理が姿を消したため、せめてその名を残そ



うと備前屋が考案したのが「あわ雪」だった。料理から菓子に転身することもあるのだと、この菓子を通じて知った次第。菓子の歴史は、やはりおもしろい。

うと備前屋が考案したのが「あわ雪」だった。料理から菓子に転身することもあるのだと、この菓子を通じて知った次第。菓子の歴史は、やはりおもしろい。

◆備前屋

住所：愛知県岡崎市伝馬通2-17

電話：0120-234-232

お知らせ

▽編集会は、十月十日(第二日曜日)に発行所にて行う。

▽十一月号原稿は、十月一日(水)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考慮あわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は、毎月の三河アララギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不要です。

歌稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰め(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

△今年の夏は、例年になく暑さが厳しかった。ようやく過ごしやすい季節がやってきました。

九月十二日は十月号の編集会。掲載歌の誤字、脱字など正したり、割り付けをしたりと、真剣に作業が進められました。

今月も三河アララギが発刊できると安堵して解散しました。

△日常の雑事にかまけて、気がつけば原稿の締め切りが間近に迫り、慌てるというのではないように心掛けたいものです。日々心を引きしめ、豊かな心境で作

歌に心掛けたいものと思えます。

△歌の心を日頃の生活の中に見付け、小さな心の動き、自然の中で気付いた発見、感動などわかりやすい言葉でつづつていけばよいと、思います。その素直な表現が、他の人の共感も得ることができるということを、常に忘れないようにしたいものです。

(山口)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月日より、半ヶ年分二万円、一ヶ年分三万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二万円、一ヶ年分四万円とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十二年九月二十五日印刷 第五十七巻 第十号
平成二十二年十月一日発行 定価 六 百 円

編集部

岡本 八千代・小野可南子・夏目勝弘
平松 裕子・山口千恵子

発行人

今泉由利

三河アララギ会

三河アララギ発行所 〒四四一・〇三二一
豊川市御津町御馬西三七
TEL (〇五三三)七五・二〇〇九
振替口座 〇〇八三〇・六・五六三二九

URL
E-mail yun88@cronos.ocn.ne.jp/
Homepage <http://maizumiyun.jp/>

印刷所

株式会社 桜創美